

國學院大學學術情報リポジトリ

民間伝承における「面」の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西座, 理恵, Nishiza, Rie メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002479

本論は「面」と関わる民間伝承の研究であり、表現に「面」を取り入れた文芸作品や口頭伝承を論じている。構成は、序章、先行研究の紹介、第一部「昔話における「面」」の一章から四章、第二「肉付き面」モチーフの生成と変容」の一章から三章、第三部「酒呑童子」伝説の変容と「肉付き面」モチーフの一章から四章、第四部「ひよつとこ」の「面」の解釈」の一章と最後に終章をおいている。

序章では日本における面の歴史を概観して、信仰の対象とされた面が伝統芸能で用いられるようになり、やがて話の世界にも取り入れられていく過程について述べる。面を用いた話の世界における表現は、現代においてもマンガやテレビの作品で用いられており、そうした作品では仮面が変身と結びつき、変身の象徴となっている。昨今のマンガやテレビ作品では、人が仮面を付けて変身する対象は正義のヒーローであり、仮面を付けることによって特殊な能力や超人的な力を手に入れることが多い。しかし、近代に至るまでの口頭伝承、文芸作品において人が面を付けて変身するのは、鬼か恐ろしい異形の姿であった。話の世界において顔に付けた面が外れなくなる表現を「肉付き面」モチーフという。「面」を悪事に使用したり、悪心を持つて面を付けると顔から離れなくなり、鬼や異形の姿となる。お伽草子『磯崎』は「肉付き面」モチーフを取り入れた作品であり、磯崎殿の妻は嫉妬心から鬼面を付けて後妻を脅し、そのまま鬼面が顔に付いて離れなくなる。日光山の稚児である息子の説教によって鬼面は外れる。このように近世期の文芸作品や浄瑠璃の脚本では宗教者によって面が外される一方、「肉付き面」モチーフを取り入れた伝説においては面が外されず、人が鬼になる話もみられる。そのような「肉付き面」モチーフの用いられ方の相違には、「面」に関する何らかの決まりごとが反映されているのではないかと推測し、「肉付き面」モチーフや面を話に取り入れた昔話、伝説、文芸作品を取り上げて、「面」が作品においてどのような意味合いで用いられているかについて考察した。

「先行研究の紹介」では、一、「肉付き面」モチーフ、二、お伽草子『磯崎』、三、昔話「肉付き面」、四、蓮如伝説、五、酒呑童子、六、お伽草子『伊吹童子』と「伊吹弥三郎」伝説、七、仮面、八、「摩多羅神」に関する論考を取り上げた。魔多羅神は天台宗の常行三昧堂の後戸に祀られる芸能の神といわれている。「先行研究の紹介」に挙げた論考のなかには、本論のなかで引用や言及をしていないものもあるが、これらの貴重な研究からは多くの教示を受けた。

第一部第一章「昔話「肉付き面」と蓮如信仰」では、蓮如伝説、「嫁威肉附面」説話の類話である昔話「肉付き面」を取り上げて、収集した百話の内容を分析した。昔話「肉付き面」は「蓮如伝説」、「嫁威肉附面」縁起と話の内容において異同は少ないが、姑が嫁にさせる仕事を具体的に語る点に特徴がある。百話を、A、蓮如伝説が数多く伝承されている地域、B、浄土真宗の信者が多い地域、C、それ以外の地域に分けて内容を分析したところ、Aの地域では蓮如や寺院の力を強調して語る傾向があるのに対して、B、Cの地域では蓮如信仰の影響は小さく、Cの地域では寺参りについて語らず、嫁を実家に帰すために恐ろしい面で脅すという話もみられた。そして、嫁の仕事の内容が「夜なべ」と抽象的に表現される一方、米や雑穀、豆や粃を石臼で挽粉にする、苧績を紡ぐというように具体的に語る話もあった。嫁姑の昔話のなかには、姑が嫁を実家に帰そうとして夜なべで苧績を紡ぐ速さを競う話がある。昔話「肉付き面」にみられる嫁の仕事は、嫁姑の昔話のなかにもみられ、Cの地域では嫁の寺参りを嫌うために面で脅すのではなく、実家に帰したくて脅すと語るものもあるところから、嫁姑の葛藤譚が蓮如信仰や浄土真宗の教化譚に取り込まれた可能性があると考察した。

第一部第二章「昔話「肉付き面」の背景―近世社会における女性と生活―」では、昔話「肉付き面」にみられる嫁姑の関係から昔話の背景について考察した。南方熊楠の『磯崎』に関する論考には、インドの古い仏典『雜宝藏經』や中国の古典に嫁姑の葛藤譚があると記されている。昔話には仏典や説話から翻案された嫁と姑の葛藤譚があり、そうした話の特徴は「孝行」を説くことである。よって、姑に危害を加えた嫁には天罰がくだる

話が多く、反対に姑が加害者となる話はみられない。そこから、姑が嫁をいじめて戒められる昔話「肉附き面」は、古い仏典を翻案したものではないと考えた。浄土真宗の教化譚にみられる「嫁威肉附面」説話を流布させた書物に、浄土真宗と関わる名所を記した『二十四輩順拝図会』がある。『二十四輩』『吉崎山』では、説教を聞きに蓮如の元に通う夫婦と、それを快く思わない姑との対立が描かれる。この話における夫婦と義父母とのやりとりは創作であるが、『二十四輩』と近い時期に刊行され、徳川幕府が編集に携わった『官刻孝義録』には当時の夫婦あるいは嫁と義父母と家庭における関係が記されている。そこから、『官刻孝義録』にみられる嫁の仕事や寺参りの状況を参考にして、当時の嫁姑の関係について考察した。さらに、近世期の浄土真宗における女人講の実態は寺院に赴くのではなく、講に加入する女性たちが家に集まり持仏などを拝する形で行われていたようであった。嫁姑の間柄が、家庭内において問題視されるのは十八世紀初頭であるという社会学分野の論考もふまえて、昔話「肉附き面」は近世期の嫁姑の関係を反映した話であると推測した。

第一部第三章「昔話「鬼の面」における「鬼面」の呪力」では、昔話「鬼の面」を取り上げた。この話では、鬼面を被った者が図らずもばくち打ちや盗賊を脅かして金銭を手に入れるというように、鬼面に招福性が備わっている。天台宗の口演説教のテキストと推測される説話集『法華経直談鈔』「友を見て鬼と思う事」、『直談因縁集』「魔の所以について」の二話のなかに、山中の暗い場所で猿楽者が衣装や面を付けて暖を取ろうとしたところ、周囲の者が鬼と勘違いして逃げ出し、猿楽者も一緒になって逃げたという話があり、先行研究においてもすでに昔話「鬼の面」との類似性が指摘されていた。その二話の説話が典拠としたのは仏典『百喻経』であると考えられている。『百喻経』も寒さゆえに衣装を着けたところ、鬼と勘違いされたという話であるが、顔が寒くて面を付けたとは記されていない。そこから天台系の寺院で行われる摩多羅神の祭祀に関して、例えば日光山輪王寺では面の行道が行われ、多武峯談山神社では面がご神体であるという例を示して、そうした信仰が天台系説話に反映されていると考察した。そして、昔話「鬼の面」における鬼面の招福性については、お伽草子や狂言、神楽の詞章のなかに、鬼の呪宝に関する言及が散見されることから、鬼が呪宝を持つという言い伝えが時代を経るにしたがって、「鬼面」が現世利益を招くという見方につながったと考察した。

第一部第四章「昔話「鬼の面」における「愚息型」と「孝行女」型の考察」では、昔話「鬼の面」をその内容から「愚息型」と「孝女型」の二つのタイプに分けて、双方の話の分布を示し、内容を分析した。「愚息型」は岡山、鳥取、島根、広島県の山間部に集中して分布する。この話では主人公が山間部から都市に年越しの買い物に行き、金銭的な価値のない鬼面を買って帰る。市が立つ具体的な町の名前、また小間物売り歩く行商人も登場することから、話の媒介者として山間地や都市を行き来する商人を想定した。また、「愚息型」では、一見愚者にみえる主人公が鬼面によって富を得る。そこから、『蒜山盆地の昔話』で「主人公は一見愚人のようであって、実のところは成功者に仕立てられたりする」と指摘される「村うちの愚か村話」の系列にあると推測した。一方、「孝女型」は奉公に出る女兒の孝行譚であり、細井平洲の儒教の教諭にも取り入れられているが、教諭が行われたという愛知県では一話も分布がみられず、『心学道話』にも類話はみられなかった。「孝女型」の話もまた山間部の地域に分布する傾向がみられた。「愚息型」が伝播しない地域の「孝女型」の話では、女兒に名前が付されており、絵本による話の伝播も考えられる。こうした特徴から、「孝女型」は近世期にさかんに説かれた孝徳思想の影響によって、「愚息型」のあとに成立したのではないかと推測した。

この二つのタイプの話に共通してみられるのは、山間地域で物を生産する人々の貨幣経済に疎い側面であり、こうした人々が話の最後には富を手に入れる姿を語るところに、物を流通させる商人たちと物を生産する人々との葛藤が潜在しているのではないかと考えた。そのような側面から、昔話「鬼の面」には近世期の経済格差の問題も反映されていると考察した。

第二部第一章「肉附き面」モチーフの変容」では「肉附き面」モチーフの用いられ方の多様性について述べた。面を用いる神事習俗には、『福井県史』で紹介される「エビス・（恵比須）・大黒の綱引き」のように、面を粗末に扱うと顔に付いて離れなくなるという言い伝えを伴うものがあり、信仰と深く関わっている。一方で、『福井県大野郡誌』『村誌稿』では一向一揆で平泉寺を滅ぼして面を盗んだ者の顔に面が付いて離れなくなっ

たというように、宗教的な意味合いがみてとれる。近世の文芸作品に取り入れられる「肉付き面」モチーフでは、男性が「肉付き面」となった女性の顔から面を外すという話が複数ある。柳田國男は「妹の力」のなかで「肉付き面」モチーフとは、女性が祭礼において仮面を付け、水の神に扮する時に神か我かの境が恍惚として分からなくなることを意味するかと思うと述べている。こうした柳田の考察について、「肉付き面」の変容のパターンを示しながら検討を行った。

第Ⅱ部第二章「白馬村の「七道の面」伝説」では、長野県白馬村の切久保諏訪神社の七道祭の面にちなむ「おかる」の伝説を取り上げた。姑と仲の悪い「おかる」という女性は、神社が所有する恐ろしい面を付けて姑を脅したところ面が外れなくなり、山へと登る。小池直太郎編、爐邊叢書『小谷口碑集』の「尾花踊と七当の面」とによるものである。『小谷口碑集』には『遠野物語』の影響がみられるという花部英雄の先行研究をもとに、「おかる」の伝説にみられる柳田の影響について考察した。また、「口碑集」のもとになった『小谷四ヶ庄傳説集』と、『小谷口碑集』より後に編集された『北安曇郡郷土誌稿』には、『小谷口碑集』の「七当の面」と同じ構成要素を含む伝説がみられることから、それらの伝説を表に記して内容を比較した。北安曇郡地域には山に住む姥神について語る伝説が多くあり、女性を忌避する特徴がある。また獅子の面が女性の接近を忌むという言い伝えもあることから、女性が祭礼の面を用いることに対して禁忌の意味合いを含んでいるのではないかと推測した。

第Ⅱ部第三章「肉付き面」モチーフの多義性」では、女性と「面」の問題について、山の神信仰との関わりから取り上げた。日本では山の神を女性とする地域が多くみられ、容姿が醜くて嫉妬深いとも言い伝えられており、山の神の祭礼に女性が参加するのを禁じることがある。

「肉付き面」モチーフを取り入れた切久保諏訪神社の七道祭にまつわる「おかる」の伝説では「おかる」という女性が面を悪用して顔から離れなくなる。現在にいたっても切久保諏訪神社の七道祭では女性が面を付けることはない。また、新潟県弥彦神社の大神楽でも、面を付けて神楽を捧げるのは成人男性である。そして、切久保諏訪神社には「太郎子さま」という女性の民俗神の伝承、弥彦神社の妻戸大神には、子どもを多く出産した妻戸大神から逃げた弥彦神を妻戸神が追いかけるという伝説がある。この話は山の神十二社の伝承にみられるパターンを踏襲しており、子どもを多く出産する山の女神を厭い、夫の神が逃げるのを、山の神が慕って追いかけるというものである。また、口頭伝承には嫉妬深い山の神が美しい弁天さまと夫の神をめぐってライバル関係にあるという話も伝承されている。そういった例を踏まえて、近世期の文芸作品である『磯崎』のなかで、「肉付き面」となる正妻が「山の神」のように醜悪で嫉妬深く描かれ、後妻が若く美しく描かれて対比されることから、「肉付き面」モチーフの背景に、女性と山の神の祭礼、面にまつわる問題を提起した。

第Ⅲ部第一章「新潟の「酒呑童子」伝説」では、主に国上寺に伝わる「酒呑童子」伝説について述べた。この伝説には、「肉付き面」モチーフと類似する顔の変化から鬼になるモチーフがみられる。変化から鬼になるモチーフは仏教説話の妬婦譚にみられるが、関東以北に多く分布する「酒呑童子」伝説にも取り入れられている。なかでも国上寺の「酒呑童子」伝説は、「酒呑童子」絵巻とともに絵解きで語られ、酒呑童子となる外道丸は国上寺の稚児で弥彦神社の大神楽を舞っていたと伝えている。本稿ではこの伝説の背景について、近世期の国上寺と弥彦神社の関係の変化、近世初期に流行した「酒呑童子」絵巻の特徴、近世期に「酒呑童子」譚が流行して、古浄瑠璃などで酒呑童子退治後の後日譚がバリエーション豊かに展開されたことを踏まえて、国上寺の「酒呑童子」伝説が制作された事情について考察した。

第Ⅲ部第二章「酒呑童子」になる者―顔の変化から「肉付き面」へ―では、「酒呑童子」が鬼として退治される話だけではなく、鬼になる前の話について語る「酒呑童子」伝説を内容別にA、B、Cのタイプに分類した。Aタイプの伝説では「酒呑童子」譚が他の伝説や昔話と融合している。福井県に伝わる伝説では、頼光が酒呑童子を退治した後、怨霊となって蜘蛛になり女に化けて三味線を弾き、その糸が頼光の首にからみつく。頼光がその糸を刀で断ち切ると、酒呑童子の祟りはおさまる。この話には、古浄瑠璃『頼光蜘蛛切』、昔話「蜘蛛の糸」との融合がみられる。Bタイプには、大林太良「本朝鉄人伝奇」の「鉄人伝説」の特徴を

参考にして、子どもの頃から悪童である、大酒を飲むと全身が赤くなるというような「酒呑童子」を、「鉄人」の人物形象がみられるものとして分類した。Cタイプには、顔の変化や「肉付き面」によって「酒呑童子」になる「酒呑童子」伝説を分類した。さらにCタイプを顔が鬼に変化するパターンによって三つのサブタイプC1・C2・C3に分類して、それぞれの話の傾向を分析した。分析の結果、Aは主に日本海側、Bは新潟県のみCは新潟、長野、山形、福島県に伝わっており、分布する話が地域によって分かれていることが明らかになった。話の内容によって分布地域が異なる問題については、次章への課題とした

第三部第三章「酒呑童子」伝説と鉄砲・金属産業の信仰」では、前章で課題としたCタイプの伝説の伝播を、C1タイプの類話である吉田綱富『童子百物かたり』『酒呑童子のこと』を中心に考察した。『童子百物かたり』には吉田綱富の先祖が米沢藩で鉄砲の技術をもって仕えていたことが度々記されている。吉田家の菩提寺は常慶院であり、米沢に移る以前は長野県下水内郡にあった。市川家が建立した寺院であり、吉田家は市川家と関係が深く、信越国境地域である越後の妻有出身とみられる。その地域の歴史を紐解くと、現在の長野県の高井地方では、山の知識を活かして地侍や修験が鉄砲の火器を取り扱う技術を持って、戦国大名武田家や上杉家と関わりを持っていたことが明らかになった。そして『童子百物かたり』の第一話、第二話では霊力を持つ狐が登場し、稲荷信仰や飯縄修験の影響が考慮される。そうした北信濃地域の鉄砲や火器に携わった地侍や修験者は武田家滅亡後、上杉家の有力武将である直江兼続の配下にあったようである。『与板町史』は、直江兼続の本拠地である新潟県長岡市与板町で、鍛冶師の間で稲荷信仰が盛んであったと伝えている。前章でCタイプに分類した「酒呑童子」伝説の伝播の背景には、山の知識と技術を駆使する人々の戦国期の移動が関わりと考えた。

第三部第四章「お伽草子『伊吹山酒典童子』と神事芸能の「面」」では、『伊吹山酒典童子』の話に出てくる「肉付き面」について、伊吹山山麓の雨乞い習俗とともに考察している。伊吹山山麓の甲津原という集落では、雨を降らせる能面の伝説がある。伊吹山は修験道の霊場であるとともに水分の山で、林羅山『本朝神社考』では伊夫岐神社の祭神である伊吹大明神は「八岐の大蛇の所変」であると記されている。伊吹山山麓では太鼓を使った雨乞い踊りが多く伝えられていた。『能・狂言のふるさと近江 古面が伝える中世の民衆文化』では甲津原をはじめ、東近江市の若宮八幡神社、筒井神社、大皇器地祖神社にはかつて雨乞いに使用されて、現在は御神体として奉納されている古能面が多くあるという。

また、東近江市で古能面が残される地域は木地師の本拠地でもあり、木地師がその余業として面打ちも行っていたという。世阿弥がその才能を認めたという「赤鶴」という面打師の出身である愛智庄は、かつて比叡山座禅院の所領であった。また、『伊吹山酒典童子』に登場する「大野木殿」は伊夫岐神社を崇敬する実在した氏族であり、大野木殿とともに「天文五年伊夫岐神社奉加帳」に記される井関一族は著名な面打師の家系であった。二代目井関次郎左衛門の遺作は伊吹山山麓の神社に散見される。こうした歴史的、文化的要因を視野にいて、お伽草子『伊吹童子』の諸本にヤマタノオロチ退治の神話が挿入されていることを考慮し、神話的な構造においても、伊吹大明神の子である酒典童子は鬼になる運命であり、そこに「肉付き面」モチーフが取り込まれたと考察した。

第二部第一章「作品「ひよつとこ」の「面」の解釈」では、信仰や芸能からの影響を受けない「面」の文芸における着目し、芥川龍之介の短編「ひよつとこ」の「面」について考察した。「ひよつとこ」で表現される「面」は、人間の自意識や人格の多面性という近代的な概念と関わっている。明治後期頃の文壇において、百物語のような前近代的な怪異が注目され、そうした怪異の世界が精神性の問題として描かれた。近世期には、外れない「肉付き面」モチーフの話のように、面が顔から離れなくなつて人が鬼になるなど呪的で怪異的な話があった。こうした面の怪異的な側面と人間の不可解な精神性がオーバーラップされたところに「ひよつとこ」の近代的な面の表現があると考察した。

終章「肉付き面」モチーフの背景」では、本論の研究を通して、そこから明らかになってきた話の表現と呪術の観念の影響について述べた。最初に、一節「肉付き面」モチーフの話構成する表現」として、この

モチーフの話にみられる表現の要素について言及した。そして、人が顔の変化から異類となる作品、「面」が表現に用いられている作品を表に示して、「肉付き面」モチーフが多用されるようになった時期を推測する。二節「肉付き面」モチーフと女性」では、「山の神」信仰の背景にある陰陽の呪術や「山の神」像について考察する。三節「肉付き面」モチーフと「嫁威肉附面」説話」では、「嫁威肉附面」縁起と面の信仰との関係、そして昔話「肉付き面」の背後にある嫁姑の民俗についても触れておきたい。四節「外れない「肉付き面」モチーフの話の語り手」では、外れない「肉付き面」モチーフの話にある女性忌避、血の穢れを忌むなどの特徴から、その伝播に宗教者との関わりを想定する。また修験者が面を打っていたことにも言及した。そして、「肉付き面」モチーフの考察を通じて、説教的な話のなかに身体から物が離れなくなる話があつて、離れなくなる物が面になることで、神事芸能や呪術といった面と関わる要素が話に影響を与え、話における意味合いが深くなつたと推測した。「面」は、日本の信仰や芸能における意味合いを色濃く反映しており、よつて「肉付き面」モチーフの話も一般社会における呪術の観念と深いところで結びついていると考察した。